

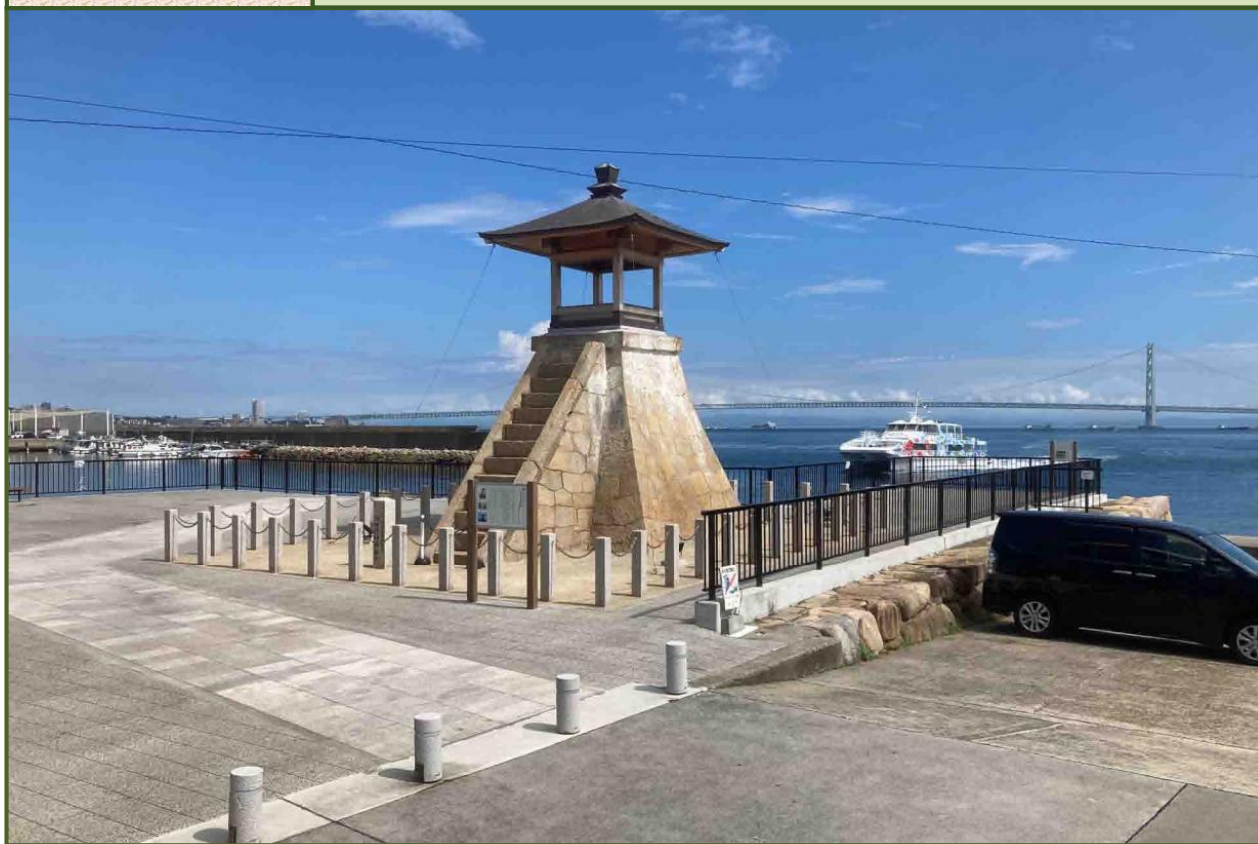


写真-1 旧波門崎燈籠堂（令和6年8月撮影）

■ 江戸時代に造られた明石港のランドマーク・旧波門崎燈籠堂

写真-1 は、明石市港町の明石港にある「波門崎燈籠（はとさきとうろう）堂」（通称明石港旧灯台、以下「旧灯台」という）で、江戸時代からある明石港のシンボルです。

昭和 38（1963）年 3 月、明石港の拡張に伴い沖合に新灯台が設置されたため、航路標識としては機能廃止になり灯器などは撤去されましたが、本体そのものは国有財産として残されていました。その後、この旧灯台は明石港の歴史を示す貴重な歴史遺産でもあることから、県と明石市が国に対して譲渡の働きかけを行い、平成 11（1999）年 9 月に海上保安庁から明石市に譲渡されました。

■ 明石－岩屋航路の今

写真-1 で旧灯台の右前方を航行する船は、明石港と淡路の岩屋港を結ぶ淡路ジェノバライン（略称ジェノバライン：所要時間約 13 分）で、その背後に見える橋が明石海峡大橋（橋長 3,911m）です。

筆者が洲本土木事務所に勤務していた平成 2（1990）年から平成 4（1992）年の頃は、明石海峡大橋がまだ工事中で、明石港と岩屋港を結んでいたのは播淡連絡汽船と淡路連絡汽船（共同運航）でした。明石海峡大橋開通後の平成 13（2001）年に両社が合併して明淡高速船に社名変更しましたが、平成 18（2006）年に経営難のため運航を休止、その航路を引き継いだのがジェノバラインです。

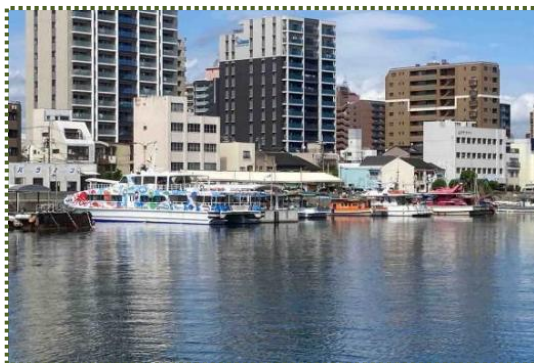


写真-2 明石港（左手のカラフルな船がジェノバラインです）

※1 采邑私記：元禄年間（1688～1704 年）の末頃に、明石藩士太田小左衛門がまとめたもので、明石郡の説明、藩の歴史、領内の町や村々の成り立ち、石高、寺院・神社・名所・名物の由緒などが漢文で記されている。

※2 旧和田岬灯台：慶応 3（1867）年 4 月幕府は英国との間で結んだ大坂条約の中で建設を約束した 5 基の洋式灯台のうちのひとつで、兵庫の開港を前に和田岬に設置されたものである。初代の灯台は明治 4（1871）年に完成し、明治 5（1872）年 10 月 1 日に初点灯された。このときの建物は八角型の木製灯台で、その後明治 17（1884）年に 2 代目となる鉄製灯台に改築された。2 代目は、昭和 39（1964）年に和田岬から須磨海浜公園に移設保存されている。現存する日本最古の鉄製灯台で歴史的文化的価値が高いことから、平成 10（1998）年に「旧和田岬灯台」の名称で国の登録有形文化財に登録された。

■ その後の波門崎燈籠堂

旧灯台は、昭和 38（1963）年まで灯台として利用され、300 年以上にわたり明石港の嚮標（みおつくし：船が往来するときの目印にするもの）として水運の発展に寄与してきました。

その間、明治 6（1873）年には、光源にガスを使用するようになり、明治 16（1883）年には白ペンキ塗りに改修されました。

昭和 28（1953）年に燈籠上部の笠部分を木製からコンクリート製に変更、併せて油紙の障子内に火を灯していたものを、屋根上部に電気照明器具を取り付け、そこから緑色の光（港の奥に向かって左側は白い灯台で緑色の光）を放つように改修されました。

そして、令和 3（2021）年に石積みの台座から切り離し、現在の位置に移設されました。



写真-5 コンクリート製の燈籠上部

平成 26（2014）年 4 月に国の登録有形文化財に登録され、加えて令和 3（2021）年 1 月には江戸時代の巧みな技術で築かれた袴腰型石積の台座が明石市指定文化財に指定され、より手厚く保護されるようになりました。

令和 4（2022）年、老朽化に伴う復元工事に着手、令和 5（2023）年 10 月 18 日、燈籠部が明治時代の写真を元に木製の姿に復元されました。

■ 戦国時代の「サラブレッド」、名君でもあった小笠原忠真

初代明石藩主・小笠原忠真（ただまね）は、明石城築城に合わせて城下町を建設、さらに明石港を築くなど、現在の明石の原型をつくった功労者です。血筋も素晴らしく、甲斐源氏の流れを汲み、曾祖父は織田信長、徳川家康という華やかな血脈を有し、大坂夏の陣では重傷を負った父を守って鬼神の如く奮戦し、明石藩 10 万石から豊前小倉藩 15 万石に移封後は「九州探題」の役割を果たしています。



写真-6 小笠原忠真（Wikipedia から引用）

忠真の系譜を遡ると小笠原氏は、甲斐源氏の祖・源義光（源義家の弟）に行き着きます。義光から発した甲斐源氏・加賀美遠光の二男・長清が、甲斐国中巨摩郡小笠原村（現・山梨県南アルプス市）に定着して「小笠原氏」を称します。長清は源頼朝の鎌倉幕府に御家人として仕え、阿波守護などに補任されています。その後の小笠原氏は、足利尊氏に従い信濃守護となり、十七代・長時の時代に武田信玄と戦って敗れ上杉謙信を頼り、さらには徳川家康に仕えるなどして命脈を保っています。この小笠原氏が築いたのが深志城であり、後に改修された国宝・松本城（写真-7）です。

忠真は慶長元（1596）年 2 月、父・秀政の二男として下総国古河（こが）城（現・茨城県古河市）で誕生。1 歳年長の兄・忠脩（ただなが）、弟・忠知らとともに、織田信長・徳川家康の「曾孫」です。というのは、時代をやや遡りますが、織田信長の娘・徳姫が徳川家康の嫡男・信康に嫁ぎ、二人の娘を生んだ後に「信康事件（信康が武田勝頼と結んで謀叛を企てたとされる事件）」が起き、信康は自刃します。残された娘 2 人は家康が手元で育て上げますが、そのうち長女・登久



写真-7 国宝・松本城

姫を秀政が娶って忠脩や忠真、忠知らをもうけました。信康は家康を、徳姫は信長をそれぞれ父とするため、忠真は兄や弟とともに二人の「曾孫」となります。つまり忠真は、甲斐源氏の流れを汲むだけでなく、家康・信長という最強の戦国武将の血を引く、まさに戦国時代の「サブレッド」であったわけです。

慶長 11 (1606) 年の元服に当たって、二代将軍・秀忠の偏諱(へんぎ)「忠」を与えられ「忠政」を名乗ります(この頃は「忠政」であったが、本多忠政と同名で紛らわしいので晩年の名「忠真」とする)。父・秀政は豊臣秀吉に仕え、その後、家康に仕えました。領地も古河から飯田(信濃)を経て、先祖の領地であった信濃松本に定着しますが、その家督は当然のことながら兄・忠脩に譲られます。

慶長 19 年(1614)の大坂冬の陣には兄・忠脩が出陣。翌年、慶長 20 (1615) 年の夏の陣には、父・秀政が出陣しますが、松本城の守備を任されていた忠脩・忠真共に幕府に無断で出陣します。本来なら厳罰に処されるところでしたが、家康はその勇断を買って従軍を許しました。同年 5 月 7 日、小笠原一族は天王寺・岡山の決戦地にいました。対する大坂方は真田信繁(幸村)が茶臼山に陣を敷き、明石全登(てるずみ)・毛利勝永が脇を固めます。その茶臼山の正面・天王寺口に布陣した徳川勢は、先鋒・本多忠朝(本多忠勝二男)ら 5 千。小笠原一族は第二陣として先鋒・本多勢を支える位置にいます。正午頃、本多勢と毛利勢がぶつかります。本多隊の陣形が乱れ忠朝は討ち死に。本多隊を救援しようとした小笠原一族は、木村宗明(木村重成の叔父)隊と戦い、乱戦の中で兄・忠脩は討ち取られ、父・秀政は重傷を負います(後に死亡)。忠真は父を守って鬼神の如く奮戦しましたが、自らも数ヶ所を負傷、鎧を血に染めて退却しました。

翌日、京都に赴いた忠真は父と兄の遺骸を茶臼(だび)に付し、遺骨を松本に送りました。重傷を負っていた忠真には、家康・秀忠から見舞いの使者が送られ「奮戦見事。まさに我が鬼孫ぞ」と家康から誉められたとか。

戦死した兄忠脩の嫡男・幸松丸(後に小笠原長次)は幼年であったため、7 月になって秀忠は、忠真に小笠原家と松本 8 万石を継承することを命じました。同時に、兄の正室である亀姫(本多忠政の娘)を忠真が娶ることになりました。

小笠原家を継いだ忠真は、2 年後の元和 3 年(1617)に 2 万石加増され、播磨明石藩 10 万石に移封、さらに 15 年後の寛永 9 (1632) 年には、豊前小倉藩 15 万石に移封されます。これは、西国譜代大名筆頭として「九州探題」ともいえる立場で、九州の玄関口で九州全体と外様大名とを監視する役割を担わされたことになります。

忠真が小倉に入るのと同時に、同じ豊前の支城・中津城には兄忠脩の嫡男・小笠原長次が、播磨龍野藩から 8 万石で入封しました。また忠真の弟・忠知も豊後杵築藩 4 万石を与えられ、小笠原一族は、忠真を軸として大きな飛躍を遂げました。

■ 茶の湯、焼き物、糠漬け…文武両道だった忠真、しかも律儀で部下想い

忠真は、律義で誠実、部下や領民に対しても憐み深い人物だったといわれています。家を継いだ時、兄の遺児・長次がまだ幼少のため成人の暁には長次に家を譲るべく将軍秀忠に内願していたそうです。秀忠はその義理堅さに感心しつつも、長次には 12 歳になったのを機に龍野藩 6 万石を与えて独立させ、明石藩は従前どおりとしています。忠真はそれでもまだ気が済まず、古くからの老巧の家臣や先祖伝来の家宝類のほとんどを長次に与えるなど、その律儀ぶりと無欲ぶりに人々は感心したとか。

また、忠真は体躯雄大、武勇に秀でていたので、家康もよくそれを自慢していたそうです。加えて多芸多才で、弓、馬、流鏑馬のほか相撲も好きで、それでいて小笠原流礼法の家元で、茶道、陶芸、加えて大名としては珍しく料理も上手だったそうです。

部下をいたわるのは小笠原家の家風となっていて、冬、狩りから帰ると、城内の「御焚火の間」で自ら獲物を料理して家臣たちに振舞いつつ、昔の合戦話を聞くのを楽しんだとか。そんな時でも寒い戸外で城内警備についている家臣たちの身を案じて、熱い酒や料理を届けさせたりしたので、家臣たちはその温情に感激していっそう忠勤に励んだといわれています(誰とはいいませんが、あの方も忠真のような振る舞いができていれば…)。

こんな逸話も残されています。忠真は糠漬けを好み、松本から明石に移封の際も、明石から小倉に移封の際にも、糠床を持ち込んだといわれています。その「糠漬け」を領民にも奨励し、領民も好んで食したと伝えられています。

忠真は、寛文 7 (1667) 年 10 月死去。享年 72。長命を保った戦国武将でした。

■ モノローグ

旧灯台は、「設置年代は2番目に古く、石造では最古」とされているそうですが、いろいろと条件を付けて1番にするのは如何なものかと思います。あの方が言っていたのを思い出しました。「2位じゃダメなんですか?」。そういえばこんな歌もありました。

♪ No.1 にならなくてもいい、もともと特別な Only One ♪



写真-8 明石港口に立つ波門崎燈籠堂
(『失われた風景を歩く』から引用)



写真-9 明石港口に立つ波門崎燈籠堂(明治後半から大正初期)
(『神戸今昔散歩』から引用)

デュランタ

クマツツラ科デュランタ属の熱帯性花木で、原産地は米国フロリダ州からブラジルにかけての熱帯アメリカ。分類上は常緑樹だが、日本では通常、秋から冬にかけて低温のため落葉する。6～9月に垂れ下がる花茎に径1cmほどの紫色の花を房状につけるが、暖地では通年咲く。咲き終えると、オレンジ色の果実を多くつける。日本では、特に濃紫色の花びらに白い縁取りが入るタカラヅカが人気品種として多く栽培されている。写真-10は、県道・明石港線沿いの植栽帯に咲いていた縁取りのないデュランタ。



写真-10 デュランタ

【参考資料】

- 1 『明石港の「みなと文化」』 橘川真一 平成22年8月
<https://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/report/064.pdf>
- 2 『播磨国明石城絵図』 国立公文書館デジタルアーカイブ
<https://www.digital.archives.go.jp/gallery/0000002017>
- 3 『明石城関連絵図資料集』 明石葵会 平成28年3月
https://adeac.jp/akashi-lib/viewer/mp000050-100150/akasi_ezu/
- 4 『明石港と旧波門崎燈籠堂(明石港旧灯台)』 一般社団法人 明石観光協会 令和5年1月
<https://www.yokoso-akashi.jp/facility/2501>
- 5 『WEB 歴史街道：小笠原忠真～戦国最強のサラブレッド！家康が鬼孫と激賞した小倉藩祖』 江宮隆之 令和6年12月更新
<https://rekishikaido.php.co.jp/detail/6164>
- 6 『明石城をめぐる歴史の旅』 黒部 亨 平成12年8月
- 7 『海と灯台ニュース～復旧作業進むシンボリックな旧灯台』 日本財団海と灯台プロジェクト 令和4年3月
<https://toudai.uminohi.jp/report/post-5368/>
- 8 『旧波門崎燈籠堂、淡路ジェノパライン、明石港、和田岬灯台、デュランタ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 9 『失われた風景を歩く～明治・大正・昭和』 ビジュアルブックス編集委員会編 平成14年7月
- 10 『神戸今昔散歩』 原島広至 平成23年9月

※発行：令和7(2025)年11月 『ひょうご水百景』No.222

改訂：令和8(2026)年 8月 『ひょうご水百景』No.222